

コラム 西洋古代史の泉 10

ローマ皇帝のイメージ

南川高志

マルクス・アウレリウス・アントニヌス（121年生まれ。在位161年～180年）。ストア派の哲学者としてもよく知られたこのローマ皇帝について本を書くべく、私はここ数年、少しずつであるが史資料を調べている。大学入学直後に彼の著書『自省録』を神谷美恵子訳で読んだことが、ローマ史研究へと私が進むきっかけのひとつであった。そして、40歳頃までに、この皇帝の政治について本や論文でいくどか書いてきた。古代の終わりに書かれた彼の伝記の翻訳も刊行している。今構想している本では、『自省録』に込められた彼の思想をできるだけ多く取り込みながら人物の全体像を描いてみたいと思っているが、ストア哲学の勉強不足ゆえに執筆はなかなか進んでいない。

『自省録』は、著者であるマルクス・アウレリウスの思想を知るためだけでなく、彼の家族・親族や周囲の人々について知るためにも重要な資料である。とくに、第1巻には家族・親族や教師などへの謝辞が記されており、たいへん貴重である。意外なのは、彼を「ウェリッシムス（最も真正なる者）」と呼んでかわいがり、将来の帝位継承者への途を開いたといってもよい皇帝ハドリアヌスが、謝辞の対象者として見いだせないことだろう。一方、養父で先帝のアントニヌス・ピウス帝については、マルクス・アウレリウスは非常に多くのスペースを割いて、賞賛と感謝の言葉を書き綴っている。マルクスはアントニヌスから、「温和であること」「いわゆる名誉に関して虚しい虚栄心をいだかぬこと」「労働を愛する心と根気強さ」「公共的精神」など実に多くを教えられたとする。他にも、アントニヌスが「帝国の用務について日夜心を砕き、その資源を管理し、そのために起る非難を甘んじて受けたこと」に学び、「雄弁とか、法律、倫理、その他の事柄に関する知識など、何かの点で特別の才能を持った人々にたいしては、妬みもせずにゆずったこと。それのみか彼らを熱心に後援して、各々がその独特の優れた点に応じて名誉をうるようにはからった」ことに模範を示されたとしている。そして、「彼は粗暴なところも、厚顔なところも、烈しいところもなく、いわゆる『汗みどろ』の状態になることもなかった。彼の行動はすべて一つ一つ別々に、いわば暇にまかせてというように、静かに、秩序正しく、力強く、終始一貫して考慮された」とも書いている。第6巻では「あらゆることにおいてアントニヌスの弟子として振舞え」とまで書いている（以上の『自省録』からの引用は、神谷美恵子訳、岩波文庫改訂版、2007年に拠るが、人名の音引きは除いた）。

ところで、マルクス・アウレリウスとはどのような容貌の人だったのだろうか。幸い、彼にはかなりの数の頭部像の彫刻が残されている。ヒゲを蓄えた皇帝即位後の容貌だけでなく、アンニウス・ウェルスやアウレリウス・カエサルと名乗っていた若き日の容貌を伝える彫刻もある。また、ローマ市の中心、カンピドーリオ広場中央に立てられた同皇帝の騎馬像が、全体的なイメージを印象的に伝えてくれる（現在広場にある騎馬像は複製であり、オリジナルはカピトリニ美術館内に展示されている）。カンピドーリオ広場にあるカピトリニ美術館の入口近くに展示された数点の大きな浮彫も、この皇帝の姿を教えてくれる。

さらに興味を引くこの皇帝の記録は、カンピドーリオ広場からコロソ通りを北に歩いたコロナ広場に立つマルクス・アウレリウスの記念柱に見られる。この記念柱は、トラヤヌス帝広場に立ち、同帝が2世紀初めに行ったダキア遠征の様子を浮彫に描いたトラヤヌス記念柱と同じように、マルクス・アウレリウスが行ったマルコマンニ戦争の様子を柱の周りに描いている。同帝存命のうちに工事が始まり、セプティミウス・セウェルス帝治世初めの193年までに立てられた。



現在見ることのできるドーリア式円柱そのものの高さは30メートルであるが、建てられたとき、柱は高さ10メートルの基壇の上に置かれていた。さらにその下に厚さ3メートルの基礎があった。この円柱を1589年に復元したローマ教皇シクストゥス5世は、その当時の地面の高さで復元したので、基礎だけでなく、基壇の一番下の部分、高さにして3.8メートル分も埋めたままにした。従って、現在見ることの出来る基壇の部分は、基壇全体の3分の2ほどである。基壇の表面には、この柱の描く情景や修復のことなどの説明がラテン語で刻ま

れている。直径は最大部分で3.7メートルほど。現在円柱の頂上にはパウロの像が置かれているが、建立時はマルクス・アウレリウスの像が置かれていたと考えられている。円柱の周囲にはマルコマンニ戦争の様子がらせん状に浮彫として描かれており、円柱内部も上へ上るためのらせん状の階段になっている。

この円柱に描かれた浮彫の情景は、マルクス・アウレリウス治世に生じたローマと北方諸部族との戦いであるマルコマンニ戦争を再現するための重要な資料として、古代の歴史書と照らし合わせつつ研究されてきた。私もこれまで、Willem Zwicker, *Studien zur Markussäule* (Amsterdam, 1941)などを参照してきた。美術史の観点からは、わが国でも中村茂夫氏の研究がある。ローマの建造物や遺跡は、

修復工事のため頻繁に覆いが掛けられ、私は今までこの円柱を間近に眺める機会を持つことができなかったが、今年のローマ滞在時によりやく見ることができた。カメラのズームレンズを使って柱の上の方まで浮彫を眺めただけでなく、宿泊したコロナ広場そばのホテルの朝食の場が屋上のテラス



だったおかげで、そこから円柱の頂上部分も観察することができた。マルコマンニ戦争の際に生じた「雨の軌跡」を描いた浮彫部分（上の写真中央部を参照）など、それまで研究書の写真でなじんではいたものの、直接見られたことは嬉しかった。この記念柱の浮彫に描かれた皇帝はたいへん厳しい表情をしており、戦場の臨場感を伝えてくれる。

さて、古代史研究は、まずは歴史書などの文献を用いて行われることはいうまでもないが、マルクス・アウレリウス記念柱のような遺跡や遺物などが与える直接性ある情報は、歴史像形成に大いに参考になる。例えば、ローマ帝政期の政治史を考えると、ローマ皇帝や帝国支配階層の人々がどのような容貌でどのような背格好であったか、イメージなしに研究を進めることは難しいだろう。幸い、ヨーロッパにはローマ皇帝の彫像を所蔵・展示する博物館が数多くあり、中でもローマ市にはそうした博物館がいくつもある。カピトリーニ美術館やローマ国立博物館などでは、マルクス・アウレリウスをはじめアントニヌス朝の皇帝家の男女の像も数多く見ることができ、本を構想する身には有り難い。

そのローマ国立博物館（マッシモ宮）で、このほど興味深い彫刻を見た。テルミニ駅に近いこの博物館には、建物の周囲の柵に布製の広告が貼ってあり、そこには「Marcus Aurelius dixit.」と書いてあって『自省録』の文章が引用紹介されている。マルクス・アウレリウスの像をいくつも見られると期待を持って入館した私は、過たず、2世紀の皇帝や皇帝家の人々の彫刻を数多く見ることができた。しかし、驚いたのは、皇帝アントニヌス・ピウスの裸体像の彫刻が展示されていたことである。館内展示物ゆえ写真を掲載するのは控えるが、ともかくその彫刻は、頭部はあちこちの博物館でよく見るヒゲを蓄えた温和なアントニヌス帝の顔なのであるが、首から下の裸体は若いアスリート男性の肉体なのであった。

アントニヌス・ピウス帝の治世（138年～161年）は五賢帝時代の中でもとくに事件が少ない、静かで安定した時代であった。皇帝自身、治世の間、イタリアを出ることもなかった。トラヤヌスやハドリアヌスと異なり、彼には皇帝即位前に軍事

職の経験も知られていない。即位前の公職就任といえば、クアエストル、プラエトル、コンスル、コンスル格のイタリア監督職、そして軍隊指揮をしない元老院管轄の属州アジアの総督だけである。私は長い間、このアントニヌスを温厚で寛容な貴族文官政治家と想定していた。先に引用した『自省録』におけるマルクス・アウレリウスの謝辞からもわかるように、彼については物静かな老人のイメージを持つのが自然であろう。私を驚かせたこのアントニヌス・ピウス帝像について、その詳細は調べられていない。皇帝像の理想化のための身体なのか、あるいは身体は後世の付け加えかもしれない。裸体像であることが問題なのではなく、力にあふれた強壮なアントニヌス帝像、頭部と身体が一致しないこの彫刻を見て、私は混乱してしまったのである。マルクス・アウレリウス帝についてこのような彫刻の存在を私は寡聞にしてまだ知らないが、もしあれば、私のマルクス・アウレリウスのイメージは最初から作り直しになるだろう。そして、本の執筆はさらに遅れるにちがいない。